

Pen, and Hand. Academic Press.

Garnes, Sara and Zinny S. Bond. (1980) A slip of the Ear: A snip of the Ear? A slip of the Year? In Fromkin, V. A. *Errors in Linguistic Performance-Slips of the Tongue, Ear, Pen, and Hand.*

Levelt, J. M. (ed.) (1993) *Lexical Access in Speech Production.* Blackwell

Perdue, Clive. (1993) *Adult language acquisition: cross-linguistic perspectives* Volume 2. Cambridge University Press.

Rost, M. (1990) *Listening in Language Learning.* Longman.

青木直子 (1991) 「第二言語教育における能力テストのシラバス: 聞き取り編」産能短期大学紀要 24, 195-210.

金田一春彦・林大・柴田武 (1988) 『日本語百科大事典』大修館

小谷津孝明編 (1985) 『認知心理学講座 2・記憶と知識』東京大学出版会

寺尾 康 (1989) 「語代用の言い誤りと心的語彙部門の構造について」筑波大学言語学論叢 42-60.

波多野誼余夫 (1988) 『知力をさぐる』NHK市民大学

三宮真智子 (1987) 「人間関係の中の誤解—言語表現の誤解に関する基礎調査—」鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編) 第 2 巻 31-45.

イ」はその典型的な例であろう。)

5. ま と め

以上、日本語の母語話者の聞き誤りの例を収集し、それを分類し、聞き誤りの要因を分析してみた。その結果わかったことは、次の通りである。

- 1) 聞き誤りが起きるのは、話者の意図した言語形式と聴者が聞いた言語形式の間に、音韻論的・意味論的・統語論的になんらかの類似性が見られる場合が多い。
- 2) 聞き取りは、言語のいろいろな部門（音韻・統語・意味・語用）に関与する処理を必要とするので、それぞれの部門に起因する誤りと同時に、複数の部門にまたがる誤りも生じる。
- 3) 聞き誤りの要因を明らかにするには、言語的分析だけではなく、聞き手の心理的、認知的側面からのアプローチ、特に情報処理過程の分析が必要である。

これからは今回収集したデータをもとに、日本語母語話者の聞き取り過程をさらに調査し、非母語話者との比較を行いたい。

参 考 文 献

- Aitchison, J. (1987) *Words in the Mind*. Blackwell.
- Anderson, A. & T. Lynch (1988) *Listening*. Oxford University Press.
- Bond, Z. S. and S. Garnes. (1980) Misperceptions of Fluent Speech. In Cole, R. A. (ed.) *Perception and Production of Fluent Speech*.
- Browman, C. P. (1980) Perceptual Processing: Evidence from Slips of the Ear. In Fromkin, V. A. *Errors in Linguistic Performance-Slips of the Tongue, Ear, Pen, and Hand*.
- Celce-Murcia, Marianne. (1980) On Meringer's Corpus of "Slips of the Ear" In Fromkin, V. A. *Errors in Linguistic Performance-Slips of the Tongue, Ear, Pen, and Hand*.
- Cole, R. A. (ed.) (1980) *Perception and Production of Fluent Speech*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Cole, R. A. (1980) A Model of Speech Perception. In Cole, R. A. (ed.) *Perception and Production of Fluent Speech*.
- Flores d' Arcais, G. B. (1988) Language Perception. In F. J. Newmeyer (ed.) *Linguistics: The Cambridge Survey, Vol. 3: Psychological and biological aspects*, 97-123. Cambridge University Press.
- Fromkin, V. A. (1971) The non-anomalous nature of anomalous utterances. *Language*, vol. 47, no. 1. 27-52.
- Fromkin, V. A. (1980) *Errors in Linguistic Performance-Slips of the Tongue, Ear,*

に大きく影響することは、カクテルパーティー効果として知られている。パーティーの騒音の中で会話をしている時に、どこからか自分の名前が聞こえてきたりすると、目の前にいる相手との会話は続けながらも、注意は別の方向に向けられるという選択的聞き取りが人間には可能である。これに類するものとして、他人の名前を自分の名前と聞き誤ってしまうという例が3件報告されている。自分の名前は自分にとって最も関心の高いものであるから、敏感に反応する、またはしすぎるという例であろう。

例：私の友達に「瀬端江美子」という子がいるが、誰かがその子の名前を呼ぶと「瀬端」が「田端」に聞こえたり、「江美子」が「裕美子」に聞こえ、自分が呼ばれたと思ってつい振り返ってしまう。

一般に人間の知覚に関する情報処理には二つの方向があると言われている。一つは感覚入力（データ）によって駆動され、それらを組織化して意味のある構造を作り上げようとするボトムアップ処理、もう一つは概念的構造によって駆動され、知識や仮説が先行して外界情報の分析に向かうトップダウン処理である。これらの両方向の処理は同時に進行する。（小谷津 p 169）話しことばの聞き取りにあてはめてみると、入力データの最小単位である音声処理から出発し、だんだんと上位の単位へと進んでいき、発話全体の意味解釈に至るといった過程がボトムアップ処理、それとは逆にまず概念や知識を使って一般的な予測をし、入力データをそれにあてはめていく過程がトップダウン処理である。これら2つの処理過程は、あい補って働くことにより、正しい情報処理ができるのであるが、聞き手のトップダウン処理が、強く働きすぎると誤りがおこりやすくなる。トップダウン処理とは、「幽霊の正体見たり枯尾花」という句によく表れているように、「我々が期待するものを見、そこにあるだろうと信じるものを見」させる働きをもする。（波多野 p61）聞き手の持つ予測や期待は、不完全な情報を補い、情報処理の効率をよくする働きをする反面、意味解釈を歪める原因ともなりうるのである。

このトップダウン処理の行き過ぎに歯止めをかけるのがモニターの働きである。モニターとは、自分の理解について点検する機能である。聞こえてきたインプットを自分の持っている知識と結びつけて、ある理解に達したら、整合性に矛盾がないかどうかをチェックし、もし問題があれば、聞き直したり、確かめたりする。聞き誤りに気づくのは、まさにこのモニターの働きによる。自分の勝手な思いこみで聞いていたところ、どうもへんだと気がついて、別の解釈にたどりついたという報告が多く提出されている。（「お楽しみエンゲ

E. 聞き手に関わる要因

a 聞き手の持っている知識

①言語的知識（音韻，文法，意味，ディスコースなど）

②文脈的知識（話し手に関する知識，話の状況に関する知識，話の登場人物に関する知識，既に言われたこと，これから言われるであろうこと）

③背景知識，一般的知識

b 聞き取りの技能（インプットを自分の持っている知識と照合する働き）

c 聴力

d 記憶力

e 心理状態（集中度，関心・興味）

f ストラテジー（インプットを自分にとって理解可能なものに変える方策）

g モニター

F. タスク（聞き取りによって遂行しなければならない課題）

4.2.2 聞き手に関わる要因の分析

聞き誤りに関するデータの収集に際して，誤りの例文だけでなく，それがどのような状況でおこったか，誤りのおこった原因は何だと認識しているかという点についてもなるべく詳しく記述するように求めた。その結果，聞き誤りには，聞き手に関わる要因が大きく関与していることがわかった。

まず，聞き手の持っている知識であるが，この中には言語的知識，文脈的知識，背景知識が含まれる。(Anderson & Lynch) これらの知識が不十分である場合に，聞き誤りがおこることが多い。次に，耳から入って来るインプットを，これらの知識と照合する技能の働きも重要である。知識と技能の両方が揃って，初めて言語能力が使えることになる。もし，なんらかの理由で相手の話がよく聞き取れない，理解できない時に，我々は聞き返したり，わかりやすく話してもらったりして相手からのインプットを自分にとって理解可能なものに変える方策を持っている。これをストラテジーと呼ぶ。

聴力や記憶は聞き取りに不可欠な要素である。これらが何らかの原因で低下しているときは，当然聞き誤りは多くなる。

次に聞き手の心理状態であるが，注意力や集中力が欠けている時に，聞き誤りは多く発生する。それとは逆に，自分にとって関心のある事柄については注意深く聞くので，聞き誤りにくい。自分に関わりのあるなしが聞こえ方

- A. テクスト, インプットに関わる要因
- a 音声的特徴
 - b 文法
 - c 語彙, 表現
 - d ディスコースの構成
 - e 内容・話題
 - f 伝達意図
- B. 話し手に関わる要因
- a 話者の話し方 (発音が不明瞭, 速すぎる, 声が小さすぎるなど, 音声が聞き取りにくい場合)
 - b 方言の使用 例: 夏休みに母の大阪の実家に帰省したときのこと, 私はいとこと二人で買い物に言った帰りに, 犬を連れてた女性をみかけた。互いに目が合い, 見覚えのある人だったので挨拶をした。私は向かいに住んでいる人の家の犬だと思ったので, いとこに聞いた。するといとこは, 「チャウチャウ, となり」と答えた。私は訳が分からず, 首を傾げた。犬の種類はどう見ても柴犬のような雑種で, 毛の長いチャウチャウではなかったからだ。しかし実際はいとこは「ちゃうちゃう, となり」と言ったのだ。「ちゃう」というのは関西弁では「違う」という意味で「チャウチャウ」ではなく「ちゃうちゃう (違う違う)」という否定の意味で使ったのである。
- C. メディアに関わる要因
- a さまざまな騒音 (ノイズ)
 - b 伝達経路 (対面, 電話, スピーカー, ラジオ, テレビなど)
 - c 視覚的助けを伴うかどうか
- D. 文脈に関わる要因
- a それまでにどんな話をしてきたか (「ちゃうちゃう」の例では, 聞き手が方言に不慣れなこともあるが, 犬に関する話をしてきたことが影響していると, この学生は報告している)
 - b 次にどんな話が出てくると予測されるか
 - c どんな状況で話を聞いているか (「アメが冷たい」の例)

が多い。

4.1.4 語用論的誤り

話し手の意図を正しく理解できない場合を語用論的誤りと言う。前述の「けっこうです」という例が全部で4人から報告されている。これは話し手が、相手の申し出を受けるのか、断るのかが、聞き手に判断がつかないという例である。

音声、語、文のレベルでは話者の意図した通りの形を聞いているが、話者の意図したメッセージが伝わっていないという別の例として、筆者の経験をあげたい。日本語教育のある講習会で、筆者が講師控え室にいた時、別の講師が駆け込んできて、「パンダの福笑い、知りませんか？」と尋ねられた。「パンダ、福笑い、～を知る」と使われた単語はもちろん全部既知のものであったし、文の統語構造についても問題はない。また、「～(を)知りませんか」という質問は、この状況においては、「パンダの福笑いという物を知っているか」ではなく、「パンダの福笑いがどこにあるか知らないか、見なかったか」という質問であることも理解できた。しかし、筆者の頭の中は、まっしろになって、「？」がいくつも点滅し、「いいえ」と答えるのがやっとだった。落ちついて考えてみると、駆け込んで来た講師の意図は次のようなものだったらしい。その講師は視聴覚教材についての講義を行っていて、いろいろな教材を教室で紹介していたのだが、持ってきたはずのパンダの福笑いがいないことに気づいて、講師室に駆け戻り、そこにいた筆者をアシスタントだと思って、福笑いを置き忘れていなかったかどうか尋ねたという訳である。相手の言っていることは、一字一句正しく聞き取れても、なぜ相手がそのような発話をするのか理解できないという例である。

4.2 聞き誤りの要因

4.2.1 聞き誤りの要因のリスト

以上、発話(テキスト)の言語形式に内在する聞き誤りの要因を、音韻、統語、意味、語用のレベルで見えてきたが、聞き誤りの要因はこれだけではない。学生からの報告の引用にもしばしば見られるように、その誤りがどのような文脈でおこったのか、聞き手はどんな心理状態だったかというような言語外の面にも注目しなくてはいけない。聞き誤りの要因を列挙して以下のように整理してみた。

ま体調が悪かったからかもね」と言っていたので、海の牡蠣とわかりました。

アメとカキの例は、それぞれ2人から報告されている。カキは、両方とも食べ物であるという共通性があること、雨は会話の行われている文脈からの影響が強かったと言えよう。

3) 音声的に類似性はあまりないが、聞き違いのおこった例として次のようなものがある。

例：母が友達とスエヒロの前で、待ち合わせしたけれど、なかなか来ないので電話すると、その友達はスカイラークの前で待っていたということがありました。二つともファミリーレストランで頭にスがつくけれど、そんな事で間違えるもんかなと思ってしまった。

音声的には語頭音が共通なだけで、拍数も異なるが、同じファミリーレストランというカテゴリーに属しているためにおきた誤りであろう。

4) 同じ音の連続の複合語の取り違い

例：オショクジケン：汚職/事件→お/食事/券

この例は今回の調査で一番頻度が高かったもので、6人から報告された。この2つの複合語は同じアクセント型を持ち、汚職→接待→高級料亭→食事という連想が働くことも要因の一つだろう。

学生からの報告の例：ニュースにそれ程興味もなく、耳を向けていたわけでもないときにふと、テレビから「政治家のオショクジケンが……」と聞こえ、ものすごい料亭かなんかのそういうチケットみたいな物が存在していて、それを政治家が売買してそれが法に触れているのかと変な解釈をしてしまいました。

4.1.3 統語論的誤り

話しことばでは助詞の省略が頻繁におきるので、聞き手は命題の格関係を考えながら、助詞を補って聞いている。この過程で誤りがおこることもあるし、分節化を誤ることもしばしばおこる。

例1：「ぱんつくった」パン(を)作った→パンツ(を)食った

例2：「きょうみない」今日(は)見ない→興味(が)ない

例3：「おとした」音(が)した→落とした

例4：「さらわれる」さらわれる(誘拐されるの意)→皿(が)割れる

話しことばで省略されやすい格助詞「が」、「を」、副助詞「は」に関する誤

4 お楽しみエンゲイ：園芸→演芸

「毎週土曜日の朝5時30分、NHK ラジオ第一で「お楽しみエンゲイ」という番組を放送している。放送時間が早いので、私はこんな時間に起きる人は年寄りくらいのもものだから、NHKも気を利かせて、長屋の花見の一席でも林家菊蔵やら円楽やらにでもしてもらって放送しているのだろうと感心していた。しかしアナウンサーの紹介により、エンゲイ研究家の柳某さんが出てきた上、リラとライラックについての話を始めたのである。この番組は園芸番組であり、演芸番組ではなかったのだ。草木を育てることをお楽しみと表現しても悪くもないし、間違ってもいけないと思う。しかし、お楽しみとつけば、お笑いの一つも放送するのでは……と笑点愛好家の私としては思うのである。」

聞き手は、自分にとって馴染みのある単語として聞く傾向が強い。(特にエンゲイの例)

- 2) 日本語のアクセントは、意味の弁別機能を持つと言われているが、同音異義語でアクセント型のみ異なる単語についての聞き誤りはどうか。

例1 雨と飴：小雨の日、友人と歩いていたら「アメが冷たい」と言うので、今降っている雨が冷たいのかと思ったら、その時なめていたクールキャンディーが冷たかったのだそうだ。

例2 柿と牡蠣：友達が大学受験の少し前から入院してしまい、受験は病院から行ったという話を聞いていました。受験シーズンも終わり、友達と出かける機会がありました。私は「入院したんだって？どうしたの？」と聞きました。友達は「肝炎だったの」と言いました。「なんで肝炎なんかになっちゃったの？若いのに」と言うと、友達は「カキにあたったんだよ。親も食べたのに私だけあたったの」と言うのです。考えてみれば海にいる牡蠣と分かるのですが、その時私は思わず木の実の柿で肝炎になったのかと思って、「えー、古かったのかね」と言ってしまいました。友達は「生食用だから古いことはないと思うけど、たまた

- ③無声化された母音 例： おひとつ→おふたつ
母音 [i] が [u] に聞き誤られているが、この環境では、どちらの母音も無声化されている。また、この例ではその後ろの母音も [o] が [a] に聞き誤られている。
- ④共通の母音の連続 例 1: ていせいして→せいけいして [eiei] もしくは [e: e:] という母音は共通しているが、母音の前にくる子音が異なっている。
例 2: つぎとまります→ぶじとまります [cvcv] という音節構造の母音部分 [-u-i] は共通しているが、子音は異なる。
- ⑤子音の脱落 例 1: はくしゅ→あくしゅ 子音 [h] の脱落
例 2: しちじ→いちじ 子音 [ʃ] の脱落
例 3: ふちゅう→うちゅう 子音 [f] の脱落
例 4: ついか→すいか 破擦音の破裂子音部分 [t] の脱落。脱落する子音は、無声子音が多い。
- ⑥母音の脱落 例： かきおいき (柿生行き) →かきおき
- ⑦拗音の直音化 例： ひにょうきか (泌尿器科) →ひのきか
- ⑧特殊拍間の交替 例： きんしちょう (錦糸町) →けいしちょう (警視庁) 撥音が長音に取り違えられている。この例では、母音も聞き誤られている。
- ⑨音位転換 (metathesis) 例： レシピ→レピシ
「あらかし」が「あたらし」になったように、歴史的変化の要因にもなる音位転換であるが、言い誤りだけでなく、聞き誤りにもその例が見られる。

音韻論的誤りは、話者が意図して発音した音と、聴者の聞いた音の間に音声的な類似点がある場合におこりやすいと言えよう。

4.1.2 意味論的誤り

意味論的誤りの原因で、圧倒的に多いのは同音異義語の取り違えである。

- 1) 同音異義語例 1 ショウガクセイ：奨学生→小学生
- 2 タコをとった：胼胝→蛸
- 3 スイマセン：吸いません→すいません

151 (4) 音声言語の受容過程における誤りの分析

表2 聞き誤りの種類とその例

聞き誤りの種類	例
音韻論的誤り	ある日Aさんの家に部活の連絡網が回ってきた。「明日7時に掲示板の前に集合」という内容だった。ところがAさんが朝7時に掲示板に行ったところ誰も来なかった。後で友達に聞いたところ、集合時間は「シチジ」ではなく「イチジ」だった。
意味論的誤り	エレクトーンを始めた頃、「そこをピアノで弾く」と言われ、エレクトーンから離れ、ピアノに向かうと、「小さくするの」と言われた。楽器のピアノと記号Pを間違えてしまった。
統語論的誤り	「花の好きな牛」という絵本の題を聞いたとき、「牛が花を好き」なのか「花が牛を好き」なのか悩んだ。
語用論的誤り	出前を母の代わりに頼んだ時に、「混んでいるので30分から1時間はかかりますがよろしいですか」と言われたので、私は家族と相談して断ろうと思って「けっこうです」と言ったら、「どっちの意味ですか？」と怒ったように聞き返されたことがあった。注文する気があるのか、断るのか相手の人は困ったからだと思った。

を入力したら、「庭に埴輪にわとりがいる」と変換されたというのがあった。
次に、誤りの内容をもう少し詳しく見ていきたい。

4.1.1 音韻論的誤り

音韻論的誤りとは、音の聞き誤りのことで、日常頻繁に観察される。話者が意図した発音と聴者が誤って聞いた発音を対比させて、調音的特徴について分析する。

調音的特徴

①子音の弁別的素性 例1: タコ (tako) → パコ (pako)

[t] 音は、歯茎、閉鎖、無声音であり、[p] 音は両唇、閉鎖、無声音である。この二つの音は、調音点のみ異なるが、残りの特性は共通している、いわゆるミニマルペアである。

例2: てんき (tenki) → でんき (denki)

[t] と [d] の違いは、無声/有聲の違いだけであり、有聲化が起きた例である。

②調音点の近接性 例: 紅茶かでん → 紅茶カレー

[d] と [r] の調音点が近いため、聴覚印象が似ている。

表1 誤りに関するデータの種類と数

	朝日新聞記事	学生へのアンケート	計
開き誤り 会話	14	131	145
歌詞	0	39	39
読み誤り	8	52	60
言い誤り	4	7	11
書き誤り	0	2	2
ワープロ変換誤り	0	2	2
		合計	259

(データ数 145 件 表中下線部)

4. 分 析

4.1 聞き誤りの種類

聞き誤りと一口に言ってもその内容は多様である。それは、聞き取りが言語のいろいろな部門に關与する処理を必要とする過程だからである。話者の発音を聞き手が別の音に聞いてしまう音声知覚の誤り（誤聴 mishearing, misperception）、相手の発音は正しく聞き取ったが、その音の連鎖を別の語にあてはめてしまう意味論的誤解、話者の意図した文の統語構造が聞き手に理解されない統語論的誤解、また文レベルでは正しく伝わっているが、話者の意図が聞き手に正しく伝わらない語用論的誤解、および以上の要因が複合した誤解が存在する。音韻論的、意味論的、統語論的な誤解は内容についての誤解で、語用論的な誤解は意図についての誤解といふことができよう。三宮(1987)も、誤解を音韻論的、意味論的、統語論的、語用論的な誤解に分類しており、本論でもこの分類を使用することにする。

今回収集したデータの中で多かったのは、音韻論的誤り > 意味論的誤り > 語用論的誤り > 統語論的誤りの順であった。

上記の分類で複数の要因に關係すると考えられるものとして分節化(segmentation)の誤りがある。

例：母が「大仏、買った」と言うので、私はびっくりした。だが聞き返してみると、「だいぶ使った」と言っていた。

これは音韻、意味、統語の3部門にまたがる誤りであると考えられる。

この種の誤りはワープロの漢字変換の際に、しばしば経験する。今回収集したデータの中にあつた例として「にわにはにわにわとりがいる」という文

2. 調査の目的

誤りと聞いて、すぐに思い浮かべるのはフロイトの精神分析であろう。言い間違いという一見偶発的な行為が、実は無意識的衝動の現れであるという考え方である。言語心理学においても、誤りは正常な発話だけを分析していたのでは推察が難しい発話のメカニズムを反映している実例であると考えられている。(寺尾 p. 42, Aicthison p. 17) また、誤りはめちやくちゃに起こるのではなく、ある種の規則性や予測可能なパターンを持つと言われている。(Aicthison p. 17)

Celce-Murcia (1971) は、聞き誤りを研究する理由として次の4つをあげている。(p. 208)

1. 聞き手が言語処理過程で使っているストラテジーを明らかにすることができる。
2. 外国語の聞き取りを助けるヒントが得られる。
3. 機械による人間の音声認識の開発に役に立つ。
4. 言語の歴史的变化の解明の助けになる。

本研究で聞き誤りを研究対象とするのも、上記の理由による。つまり日本語の母語話者が音声言語の受容過程でどんな聞き取りのストラテジーを使っているかを聞き誤りのデータを通して推測し、それを日本語教育に応用する可能性について検討することである。

3. 調査方法

誤りに関するデータを次のような方法で収集した。データには、朝日新聞に載った記事と女子短大生に対する調査の2種類がある。朝日新聞の記事は、主として日曜版の「いわせてもらお」という読者からの投書を掲載したコーナーから、コミュニケーション上の誤解に関するものを収集した。女子短大生に対する調査は、筆者が担当していた日本語基礎演習を平成6, 7年度に受講していた学生86人(年齢18-19歳, 日本語母語話者)から、日常生活で自分が遭遇した聞き誤り・読み誤りの経験をアンケートの形で収集したものである。データの種類と数は次の表の通りである。

収集したデータの中には聞き誤りの他に、読み誤り、言い誤り、書き誤り、ワープロの変換誤りの例も含まれていたが、本論では日本語母語話者の聞き誤りに限定して分析を行う。なお、聞き誤りの中には、歌詞の聞き誤りの例も多く含まれているが、主として会話におけるデータを中心に扱うことにする。

音声言語の受容過程における誤りの分析

谷 口 すみ子

ある会話から (1996年8月29日)

夫: 最近, タコライスっていうのはやってるんだって

妻: なに, パコライスって?

夫: タコライス

妻: ああ, パコって聞こえた

夫: タコっていっても, オクトパスじゃなくて

妻: ああ, メキシコの辛いやつ

夫: うん, カレーライスみたいに, ごはんにタコスの中身がかかっているんだって

妻: ふーん, どこで食べられるのかな

1. はじめに

コミュニケーションの過程において誤解はつきものである。送り手の思考・感情を言語を媒体として、相手に伝えようとするとき、受け手は送り手の意図したメッセージを再構築しようと努力するが、必ずしもいつも成功するとは限らない。送り手と受け手の間で授受された内容や意図に食い違いがある場合、誤解が生じたという。また、送られてきたメッセージが、受け手にとって理解不能であるという場合もある。このようなコミュニケーション上の障害がおこったとき、送り手と受け手は問題の修復（リペア）を行い、元のコミュニケーションの流れに復帰しようと努める。

音声言語の受容と理解の過程でおこる誤解を聞き誤り、文字言語の場合を読み誤りと呼ぶ。また言語の産出の過程でも、言い誤り、書き誤りがおきる。これらの誤りは、母語話者と非母語話者、非母語話者同士のやりとりにおいて多く見られるが、母語話者同士のコミュニケーションにおいてもしばしば観察される。また、これらの誤りは言語発達途上にある幼児の言語に特徴的であるが、成人の話者が誤りをおかさないというわけではない。本論は母語話者（主として成人）の、音声言語の受容に関する誤りを中心に、事例の収集と分析を行った報告である。